第35回 七五読み古事記勉強会
草那芸之大刀
倭塾サロン
小名木善行

前回までのお話

やってきた八俣遠呂智（やまたのおろち）は
船ごとに頭を垂れ入れて、
酒を飲みました。
そして酔って伏して寝てしまいました。

今回のお話（現代語訳）

この後、**速須佐之男命**は、
腰に佩いた十拳剣（とつかのつるぎ）を
抜きはらって、その蛇を切り刻みました。
すると肥川は血の色に変わって
流れて行きました。

蛇の真ん中の尾を切ろうとしたとき、
刀の刃が欠けてしまいました。
そこで怪（あや）しく思って、
刀の先端でそこを刺し割ってみると、
そこから**都牟刈之大刀**（つむかりのたち）が
出てきました。
この大刀を取りあげ、
異（けしき）ものと思い、
これを**天照大御神**に献上しました。
これが**草那芸之大刀**（くさなぎのたち）です。

しかしてはやの　すさのをの　尓速須佐之男命
みことのこしに　はかしたる　拔其所御佩之
とつかのつるぎ　ぬきはなち　十拳劍
そのへびきりて　ちらかせば　切散其蛇者
ひかわちいろに　かわりたる　肥河変血而流

そのなかのおを　きるときに　故切其中尾時
みかたなのはが　こわれたり　御刀之刃毀

あやしくおもひ　みかたなの　尓思恠以御刀
さきをばさきて　なかみれば　之前刺割而見者
つむがりのたち　そこにあり　在都牟刈之大刀
ゆゑにこのたち　てにとりて　故取此大刀
あやしくおもひ　あまてらす　思異物而白上於
おほみのかみに　まをしあぐ　天照大御神也
これくさなぎの　たちといふ　是者草那芸之大刀也

（那芸二字以音）

赤い土石流

太刀を腰に佩（は）くと書かれていますが、
「佩く」は立派なものを身に付けるという意味です。
腰に付けるということは、私物化するということです。

須佐男命が、その太刀で蛇を切り刻むと、
肥川が血の色に変わったとあります。
表面上の文脈だけ見れば、
大蛇を退治して、
その血で川が赤く染まったというお話になります。

ただ、ここまで見てきた通り、
八岐大蛇を「洪水」と考えれば、
これは鉄の赤錆を多く含んだ土石流が
無事に流れていったことを
象徴的に表していると読むことができます。

草那芸之大刀

その後、蛇の尻尾から刀が出てきたというのですが、
腹から出てきたというのならまだしも、
普通に考えて、尻尾から刀が出ることはありません。

むしろこれは、洪水を治めることによって喜んだ
日頃船通山から出る鉄鉱石を用いてたたら製鉄をしている
鳥髪盆地の人々が、須佐之男命に最高級の玉鋼を用いて
太刀を献上したと読むべきではないかと思います。

蛇の尻尾からでてきたということも、
大量の鉄鉱石を煮沸して、その中から最後にごくわずかしか
最高の玉鋼が採れないことを考えると、
これも納得のできる話となります。

玉鋼（たまはがね）

日本の伝統的な製鉄法「たたら製鉄」によってのみつくられる最高品質の鉄

玉鋼は、粘土製の炉「たたら」で還元精錬することで得られる鋼（はがね）で、
その名のとおり　「玉」＝宝石のように貴重で美しい
　　「鋼」＝高品質な鉄
という意味が込められた、刀剣づくりに欠かせない特別な素材です。

たたらとは、風を送り込む**ふいご**（鞴）を用いて高温を保ち、炉の中で鉄を炭素と一緒に還元する
日本独自の製鉄技術であり、日本の職人技と自然の調和が生んだ奇跡の素材です 。

作成手順を簡単に説明すると…

磁鉄鉱と木炭を炉に交互に投入
約72時間かけて燃焼と還元を繰り返す
最後に炉を壊して、中からできた鋼の塊（鉧／けら）を取り出す
この鉧から、質の良い部分だけを選別したものが「玉鋼」

玉鋼の特徴

炭素の含有量が適度にコントロールされている（高すぎず、低すぎず）
不純物が少なく、粘り強く折れにくい
刀匠が鍛錬によって性質を調整しやすい
焼き入れによって美しい刃文（はもん）が現れる

これらの特性から、折れず、曲がらず、よく切れる理想の日本刀が実現できる。

都牟刈之大刀

都牟刈という字は、
「都」が最高の位の人が住む地を指し、
「牟」はもともと牛の鳴き声の擬声の会意文字、
そこから「満足させる」という意味になる。
「刈」は会意兼形声文字で、草を刈るという意味。

太刀を草を刈ることに用いるというのは、
あまりにもったいないようですが、
もともと縄文の昔から「人を斬る」という
習慣のなかった日本では、
草を刈り農業にいそしむことを国の柱と考えていたし
そこから極めて遠慮がち、かつ温厚な表現として、
太刀に**最高名誉として**「都牟刈」の名を与えています。
実際この太刀は須佐之男命から天照大御神に献上され、
後に名も**草那芸之大刀**（くさなぎのたち）と呼ばれるようになっています。

洪水に対処してから、太刀が出来上がるまでには、相当の歳月を要したであろうということができます。

そしてその歳月、例年であれば洪水のために、わずかな作物しか育てることができなかった鳥髪村は、
今度は余るほどの豊作に恵まれたであろうことは想像に難くありません。

では余った作物はどうするのかといえば、
現代のように物流が整った時代ではなかったでしょうから、
食べ切れない分は捨てるしかなくなってしまいます。

須佐之男命は高天原を追われる際に、
千両の車駕に乗るほどの物品による過料を命ぜられています。
おそらく須佐之男命は、ただ草那芸之大刀を天照大御神に献上しただけでなく、
大豊作となった作物を、一緒に高天原に献上したのではないでしょうか。

つまり須佐之男命は、見事に高天原で課せられた罰金も支払いを終えたのです。

須佐之男命は、決められた約束のすべてを見事に果たしたのです。
これこそが男の生きざまです。

草那芸之大刀について述べておきたいことがあります。
この太刀は三種の神器のひとつとして熱田神宮に収められています。

幕末から明治にかけて活躍した国学者の栗田寛が、
著書の『神器考證』に、
江戸時代に熱田神宮の大改修工事があった際に、
何人かの熱田神宮の神官がこの大刀を見たことが紹介されています。

大刀を見た神官は祟りでことごとく亡くなってしまうのですが
一人だけ難を免れた松岡正直という神官が
「草那芸之大刀は、全体的に白っぽくて錆がなかった」
と述べたことが記録されています。

もし草那芸之大刀が青銅器なら、緑青が湧いて
緑色になっているはずです。
白く光っていたということは、草那芸之大刀は鉄製であり、
しかも手入れをしていなくても錆びないということですから、
相当上質な玉鋼で作られた古代の名剣であることがわかります。

そんなことも、須佐之男命が救った鳥髪村が
たたら場であったことを裏付ける
といえるのではないでしょうか。